

志村幸雄さんを悼む



後藤 武（彰国社相談役・元当協会理事長）

志村幸雄さんがこの2月に既にご他界だったとお知らせが、新型コロナウイルス騒動もいよいよ高まった4月中旬に自然科学書協会の事務局から届きました。私は昨夏、志村さんがご退院されたしばらく後に同氏とお会いする機会があり、その回復後とされたお元気なお姿を目にしておりまただけに、このご他界とお知らせをにわかには信じがたく、しばしその驚愕に打ちひしがれるまま過ごしておりました。

さて、志村さんと自然科学書協会の関係は、同氏がかつて当協会の会員会社だった工業調査会に勤務されていて同社の代表者で当協会理事長も務められた吉本馨氏が病気で志村さんと交代された頃に始まったのではと思われませんが、私との関係では1996年5月に当協会がその当時の朝倉邦造理事長の元で行った長野オリンピック施設や北野美術館・東山魁夷館などを巡る楽しい視察旅行の頃からではなかったかと、この催しに参加させていただいた私の記憶に残る同行者だった志村さんの残像から、そう思っております。その後、志村さんは、2002年からは専務理事として当協会の運営に携わり、理事会では司会役も担当して多士済々の争論をも持ち前の的確な判断力・分析力を発揮して上手にまとめ導いておられたと記憶します。

またその頃、突然、朝倉さんが出版界の司令塔的存在でもある日本書籍出版協会の理事長に選任されることになり、自然科学書協会理事長との重任を避けるために三期6年弱に及んだ当協会の理事長職を明け渡され、その後任に志村さんが就任されることになりました。志村さんの理事長時代には、著作権問題や再販制度など継続して取り組むべき多くの課題を抱える中での協会創立60周年記念事業もあり、2006年11月8日に記念式典・永年功労者表彰、そして記念祝賀会が出版界の代表者など160名の臨席のもと神楽坂の日本出版クラブ会館で盛大に開催されたことなどが思い出されます。

また、2007年に次期の本郷允彦氏に理事長職を引き継がれてからの志村さんは、技術評論家としての幅をさらに広げた活躍をされておりました。技術評論や科学者の評伝などを

諸紙誌に執筆されるほかご著書も多く、生涯では 40 冊にも及ぶ単行本を刊行されております。そのほか「人を笑わせ、そして考えさせる」イグ・ノーベル賞を日本に紹介し広められたことでも知られ、『笑う科学 イグ・ノーベル賞』というご著書もあり、数年前にはこの件でテレビにも出演されていましたが、その時のほにかんだ顔は忘れられません。

志村さんは日本書籍出版協会や出版クラブの活動、大学での教鞭（金沢大学講師、非常勤では母校の早稲田大学のほか麗澤大学・名古屋大学などで講師）なども含めて、自然科学書協会の定款にも謳われている科学技術の振興と科学技術書の普及を真摯に考えて実践されていたのだと思います。ほんとうに、ありがとうございました。

志村さんは、Eメールなどは不得手らしく、電話魔と言われるくらいよく電話を掛けてこられました。その電話もこのところ頻度が少なくなって途絶えがちでした。体調が優れないとは聞いておりましたが、こんなに早くお別れが来るとは夢にも思いませんでした。もう電話もかかってこないと思うと寂しく悲しい。ここに改めてご遺徳を偲び、謹んでご冥福をお祈りいたします。 合掌